

## se douter の発話のしくみ

福 田 由美子

### 0. はじめに

動詞に *se* を添えた形は一般に代名動詞と呼ばれ、文法書などにおいてさまざまな用法が説明されているものの、まだ解明されていないことが多く残っている。本稿であつかう *se douter* は、日本語を母語とする者にとって理解が難しいもののひとつである。実際、多くの仏和辞典や文法書は、*douter* に「うたがう」という意味を認めると同時に、*se douter* には「～だと思う」という正反対ともいえる意味を認めている<sup>(1)</sup>。

(01) *Je doute qu'il vienne.*

(02) *Je me doute qu'il viendra.*

しかし、*douter* のはたらきが日本語の「うたがう」のそれと一致しないことは福田（2011）で示したとおりである。*douter* は、*douter de/que X* において、「事態 *X* の蓋然性の評価にあたって、発話主体が *X* を否定的にとらえている」ことをあらわす動詞である。

(03) 私はこの薬の効能をうたがう。 (福田 2011)

(03') *Je doute de l'efficacité de ce remède.* (ibid.)

(04) (症状から) 医者は盲腸をうたがう。 (ibid.)

(04')\* *Le médecin doute de l'appendicite.* (ibid.)

(04'') *Le médecin se demande si ce n'est pas une appendicite.* (ibid.)

*se* に関する従来の記述には、「*se* は主語と同一指示である」、「*se* は主体の動詞のあらわす行為に対しての強い関与や自己投入を示す」「主体は、行為者であると同時に受益者である」などがある。しかし、それだけでは *se douter* が

「～だと思う」をあらわすことの十分な説明にはならない。

本稿では、発話者が *se douter* をもちいるのがどのようなときであるかを明らかにすることをめざす。*se douter* の使用に関しては、Stéfanini (1962), Franckel (1990), 曾我 (1999) などの論考があるが、曖昧さを残している。本稿ではさらに考察を深め、新たな観点から問題を再検討し、先行研究において明確でなかったところを明らかにしたい。

まず第1章では、*douter* の語源から出発し、古フランス語における *se douter* の意味を概観する。第2章では、先行研究の検討をおこなう。第3章では、*se douter* の使用実態を検証し、どのようなケースにおいてもちいられるのかを明らかにする。最後に *se douter* がなぜ「～だと思う」という意味に解されるのかを、*douter* の語源にさかのぼって考察し、ひとつの仮説を示す。

## 1. *douter* の語源と古フランス語における *se douter*

### 1. 1. *douter* の語源からの考察

*Dictionnaire Historique de la Langue Française* (以下 *DHLF*) では、*douter* の語源は、*deux* をあらわすラテン語 *duo* から派生した *dubitare* で、その意味は “hésiter entre deux choses, être indécis” である、と述べられている。言いかえれば、*douter* は2者の間で迷う時の不確かさや不安感を内在する動詞を語源とするのである。

古フランス語における *douter* の意味は、Godefroy (1881) では次のように記されており、現代フランス語における意味とは異なっている。

(a) *douter* (*doubter, doter, dotteir, dolter, dulter*) ; *craindre, redouter*

(a') *se douter* ; *dans le même sens*

さらに *DHLF* の記述では、その後強調をあらわす接頭辞 *re-* のついた形も同時にもちいられるようになる。つまり、古フランス語期には *redouter* と *douter* と *se douter* が *craindre* の意味でもちいられていたということだ。やがて *craindre* の意味を伝える動詞は *redouter* のみとなり、*douter* と *se douter* は現在

の意味へと変化してきたと考えられている。

現代フランス語では *redouter* は *craindre* と同様の価値をもち、いっぽう *douter* には *hésiter* の意味合いが残っている。ところが、現代フランス語での *se douter* には、*hésiter* や *craindre* の価値が含まれていないようにおもわれ、それは再帰代名詞 *se* のはたらきのためであると考えられる。

それでは、古フランス語における代名動詞が文法的にどのように分析されているのかを見ることにする。

### 1. 2. 古フランス語における代名動詞について

古フランス語の研究家は、代名動詞を次のようにとらえている。

Ménard (1988) と Moignet (1984) は、「代名動詞の *moyen*<sup>(2)</sup> の解釈は非常にさまざまで、文脈によって決まるものである。そしてそのあらわす事行は、受動的な性質をもつ」と述べている。

また Buridant (2000) と Melis (1990) は、「*se* は主語との優先的な関係をもっている。そして、動詞のあらわす事行への主体の関与を強調する。このとき *se* を伴った代名動詞は、受動的な性質をもつ」と述べている。

用法の分類や分析に多少の相違はあるものの、4 人が共通して述べている古フランス語の代名動詞の受動的性質とは、「外部へのはたらきかけのみにとどまらず、その結果や状態が主体自身にもどるという意味において、受動的な性質をもつ」ということである。

それでは、次に、実際に古フランス語において *se douter* がどのようにもちいられていたのかを観察する。ただし、前述のように古フランス語では *douter* と *se douter* が同じ意味であったとされているので、比較のために *se douter* だけでなく *douter* がもちいられている文も観察の対象とする。

### 1. 3. 古フランス語における *douter* と *se douter*

この考察をすすめるために、古フランス語のテキストである *Le Roman de Tristan en prose* (以下 *Tristan*) と *La mort le Roi Artu* (以下 *Artu*) をコーパス

資料としたのであるが, *Artu* には *douter* および *se douter* を含む文が少なかったため<sup>(3)</sup>, 本稿においては *Tristan* における文を例として挙げる。また, 古フランス語においては, *douter de/se douter de* ばかりではなく, *douter* や *se douter* が直接目的語をとる場合がみられたり, *que* 節にも直説法や接続法をとる場合がみられるが, 本稿においては意味の解釈だけに焦点をあてる<sup>(4)</sup>。解釈の際の手がかりとなるのは文脈のみである。

- (05) Et certes de tout l'esfort de Cornuaille ne de tout le secors que de Cornuaille lour porroit venir ne **douterioie** je noient, (. . .)

(*Tristan* 4-14-206-p.302)

「きっと, コルヌアイユの軍力に関しても, コルヌアイユから彼らのところに来るいかなる援助に関しても, 私はまったく心配しないであろう。」

- (06) Par foy, fait li rois Pellés, je quit bien qu'il soit preudom. Mais je **dout** qu'il soit autrement que tu ne contes. (*Tristan* 8-9-158-p.237)

「誓って, 私は彼が賢者だと思う。しかし, あなたが言っているような人物であるかどうか心配だ。」

- (07) Il avoient demandé le non du chevalier pour ce que trop durement **se doutoient** de Lancelot du Lac : (*Tristan* 5-6-120-p.199)

「彼らはその騎士の名をたずねた。湖のランスロを恐れていたから。」

- (08) La roïne conmenche a penser quant ele entent les paroles de la damoisele, car mout **se doute** durement que li rois March ne mant aucune felonnie au roi *Artu* et a la roïne Genievre, dont damages puisse venir.

(*Tristan* 4-13-176-p.267)

「王妃は乙女のことばを聞いて考え始める, というのは, マルク王がアーサー王とジェニエーブル王妃に不忠をはたらかないか, そうなったら災いがおとずれるのではないかととても心配しているから。」

これらの例から, Stéfanini (1962) が, “*douter* avait aux deux voix, active et pronominale, un même sens assez proche de celui de l'actuel *redouter*. Mais *se*

*douter* c'est subir les effets de sa crainte, ou même de son doute" (p.118) と説明しているように、*douter* は主体が「恐れる、心配する」感情を伝えているが、*se douter* は主体に「sa crainte や son doute の影響が及ぶこと」を伝える文脈にもちいられているようである。これが *se douter* の受動的な意味であるといえる。

それでは、現代フランス語において *se douter* はどのようなはたらきをもつ動詞なのであろうか。その解明のために、まず先行研究を概観する。

## 2. 先行研究

Stéfanini (1962, pp 117–118) は、

"L'écart qui sépare *douter* de *se douter* est aujourd'hui incontestablement d'ordre sémantique et c'est lui qui explique l'on dise : *je doute qu'il vienne* (il y a moins de 50% de chances en faveur de sa venue) et *je me doute qu'il viendra* (avec *se douter* on passe le seuil du probable : il y a plus de 50% de chances qu'il vienne)."

と述べ、*douter* と *se douter* の意味の差異を記すにとどまっており、それが生じるしくみには触れていない。

Franckel (1990, pp.141–142) は、*se douter* de X について、"*douter* remet en cause l'existence de X sur le plan QNT<sup>(5)</sup>" であるのに対し、*se* のはたらきを "(à la présence du réfléchi qui) marque un repérage par rapport au sujet" として、"*se douter* ne remet plus directement en cause l'existence de X, mais marque l'impossibilité pour Si de se positionner relativement à la valeur X assertée par ailleurs" と述べて、*douter* と区別している。つまり、*douter* de X が「X の存在・生起の有無」を問題にするのに対し、*se douter* de X は、「主体が X が真であると断言できないこと」を問題にすると述べているのである。さらに、"*pour ce qui est de X, le sujet ne peut s'en remettre qu'à celui qui affirme X*" と続けている。これは、「主体が自ら X の真偽を断定しない」という内容であるが、具体的とはいえず、また *se douter* をもちいた発話のしくみについては触れていないと

いう点においてじゅうぶんではない。

曾我（1999, p.32）では、douter を「事物や事態について存在・生起の蓋然性が高いととらえようとするが、低いと見るべき要因も意識するために、高いととらえるにいたらないでいる」ことを表す動詞ととらえ、「douter で表す事行に「事行主体のなんらかの強い関与・自己投入」という要素が働くと、「蓋然性が高いという方向に向かう勢いが強くなり、低いとみるべき要因が多少あっても、蓋然性がある程度高いととらえるにいたる」ということ」になり、se douter の機能が生まれると分析している。曾我（1999）における douter の定義に関して、「主体が事態の蓋然性を否定的にとらえている」とするわれわれとは見解を異にしているため、se douter については、「なんらかの強い関与・自己投入」と「蓋然性が高い方向に向かう」との関係が、われわれにとっては明確ではない。

そこで、次章において se douter がもちいられた発話例を分析し、Franckel（1990）と曾我の（1999）における明確にされていない部分を明らかにする。

### 3. se douter の使用実態

#### 3. 1. 発話の分析

日常会話において se douter がもちいられている発話をしばしば耳にする（Je m'en doutais. など）。そこで、se douter がもちいられるケースを、体験をもとにインフォーマントの協力を得て<sup>(6)</sup>発話例として示し、se douter de X/que X がどのような場面でもちいられるのかについての分析をこころみる。

- (09) むずかっている赤ん坊が寝てしまった。その時の赤ん坊の父親の発話が Je me doutais qu'il allait s'endormir. であった。状況を父親にたずねたところ、ふだん息子がこのようにむずかるのは眠いときで、きっと眠るだろうと思っていたところ、案の定、息子は眠ってしまったということであった。

- (10) あるフランス人が漢字で書かれた店の看板を見て、「あれは中国食品

の店か、それとも日本食品の店か。」とたずねたので、「中国食品の店である。」と答えると、彼女は *Je m'en doutais!* と言った。自分はきっと中国食品の店だと思っていたのであるが、看板が漢字であることから、日本食品の店だという考えも捨てきれずにいた、とのことであった。

まず (09) では、「赤ん坊が眠ってしまうこと」を  $X$  とすると、父親は  $X > \text{non-}X$  だと思っていたが、事実が  $X$  であるのを見て  $\text{non-}X = 0$  となり、*Je me doutais qu'il allait s'endormir.* と言ったのである。また、(10) に関しても同様に、「中国食品の店であること」を  $X$  とすると、発話主体は  $X > \text{non-}X$  だと思っていたが、正解を聞いて  $\text{non-}X = 0$  となり発話に及んだのである。

$X$  は主体の外部で生じる事態や現象であるから、その存在の有無や真偽に関しては主体が関与することはできない。そのような性質の  $X$  に関して、主体はあらかじめ  $X$  を認識していたが、同時に、 $\text{non-}X$  についても多少は認識していた ( $X > \text{non-}X$ )。そして  $X$  が確定し、 $\text{non-}X = 0$  となったときに、言いかえれば、主体内部の  $X$  と主体外部の  $X$  が一致したときに、半過去形の *se doubter de X/que X* をもちいた発話に及ぶといえそうである。

(09) に関して、父親に、もし赤ん坊が眠っていなかったらどのように言ったのか、とたずねると、*Je me doutais ...* ではなく (11) だったとのことである。

(11) *Je pensais qu'il allait s'endormir.* 「眠ると思っていたのに……」

このことから、主体内部の想定  $X$  と主体外部の事態  $X$  が一致したときのみ、*se doubter* をもちいることができるといえる。

(09), (10) では *se doubter* が半過去形でもちいられている例を示したが、それでは、*se doubter* が現在形でもちいられるのはどんなときであろうか。たとえば、友人たちと「彼」が今日の会合に出席するかどうかについて話していて、そのうちのひとりが「*Il est sérieux, et il était présent à la dernière réunion.* (彼は真面目だし、前回は出席だった。)」と発言したのを受けて、(12) と発話することができる。

(12) Je me doute qu'il viendra. 「彼は来ると思う。」

il-venir (X) は未来の事がらで、主体が関与できない、主体の外部の事がらである。発話主体だけでなく対話者である友人も、X と non-X の両方の可能性を認識している。そこに友人の発話を手がかりとして、主体の内部の X > non-X が喚起され、主体が、non-X の可能性を認識しながらも、「X の蓋然性が高い」と伝えてもよいと判断するにいたったとき、言いかえれば、発話主体と対話者の間に事態 X が生起する見込みが認識され、主体内部で喚起された X と一致したときに、se douter をもちいた発話に及ぶと分析することができる。

さらにインフォーマントによると、もし Qu'en penses-tu? と聞かれた場合には、se douter をもちいた発話はできないとのことである。(12) の発話は、主体に X と non-X の二つの可能性があるという認識があるうえで、友人の発話を「手がかり」としておこなわれたものであるが、Qu'en penses-tu? は主体の内部の X > non-X を喚起させ、二つの可能性のうちのひとつを選択させる「手がかり」となる質問ではないので、se douter は使えないのである。

また、se douter はしばしば bien をともなって発話される (Je m'en doutais bien! や Je me doute bien. など)。このときの bien は、主体の内部で想定していたことと、主体外部の事態が一致したことを確認するはたらきである<sup>(7)</sup>。

### 3. 2. 語用論的効果

(13) サッカーにまったく興味のない男性が、好意を寄せている女性に、彼女が応援しているチームが勝ったと聞かされ、Je m'en doutais! と言った。

このように、主体がどんな考えも持ち合わせていなかった場合はどうであろうか。好意を寄せている女性の発話であるから、男性は瞬時に「同意すべきだ」と考える。そこで、「自分は彼女が応援しているチームが勝つ (X) と思っていたのだ」と伝えるために、つまり、あらかじめ主体の内部に X > non-X が存在していたかのごとく伝えるために、もとは主体の中には存在しなかった



X や non-X を主体自らが構築し、そしてあたかも自らの中にすでに存在していた X が現実となり、non-X=0 となったかのような発話に及ぶ。それが Je m'en doutais! なのである。これは、se douter のあらわす事行が生む語用論的効果を利用した発話例といえる。

(14) は、友人から「息子が難しい試験を受けるのだが、彼は万全の準備をしてきた。」と聞いたときの、友人に対する発話である。

(14) Oui, je me doute bien qu'il n'est pas du genre à rater quelque chose d'aussi important.

また、そのように発話するときの主体の心境は次の 4 つのケースが考えられる。

(15) X>non-X:「あなたの息子さんのことだから、きっと合格するであろう。」あるいは、「彼は一生懸命勉強しているから、きっと合格するであろう。」

(16) X=non-X:「彼が一生懸命勉強していることは知っているが、試験は難しいので結果は五分五分であろう。」

(17) X<non-X:「試験は難しいので、彼が合格するのは無理ではないか。」

(18) 主体は特に何の考えも持っていない。

ここでは心境がどうであれ、主体は「自分は X だと思っている」と伝えなければならない場面である。そのようなとき、(19) のように発話しても問題はない。

(19) Je pense/Je suis sûr que votre fils réussira.

しかし、se douter をもちいることによって、「試験であるから、合格 (X) も不合格 (non-X) も両方の可能性があるのは理解している、それでも自分は X だと思っているのだ。」という内容を伝えることができるのである。これもまた、se douter の語用論的効果を利用した表現であるといえる。

このように、se douter は半過去形であっても現在形であっても、主体内部の想定 X と主体外部の事態 X が一致したときにもちいられるということは変わらない。また、(09) や (10)、(12) のように、主体が直接関与したり操作

することができない事態  $X$  について、主体自らの中であらかじめ  $X > \text{non-}X$  として認識しているケースと、(13) や (14) のように、主体は  $X$  についての認識はなくとも、あたかも  $X > \text{non-}X$  を認識していたかのように伝わるという語用論的効果をねらってもちいられるケースがあるということも共通している。

### 3. 3. se douter における se のはたらき

現代フランス語において、douter は「事態  $X$  の蓋然性の評価にあたって、 $X$  を発話主体が否定的にとらえている」、言いかえれば「主体が  $X$  を意識しながらも  $\text{non-}X$  だにとらえている」ことをあらわすのに対し、se douter は、「事態の存在や生起  $X$  を受けて、それが  $\text{non-}X$  を意識しながらも  $X$  を肯定的にとらえている主体自身の想定と一致していることをあらわす」といえる。このように「主体が主体自身に目を向ける」のが se のはたらきである。これは、第 1 章で見た古フランス語における se のはたらき「外部へのはたらきかけのみにとどまらず、その結果や状態が主体自身にもどるという意味において、受動的な性質をもつ」と共通しているとおもわれる。

## 4. douter の変遷に関する考察

### 4. 1. douter の変遷

第 1 章で述べたように、古フランス語期においては douter も se douter もどちらも craindre の意味でもちいられていたが、redouter がもちいられるようになってから、craindre の意味は redouter のみが担うようになり、douter と se douter が現在の意味に変わっていった。その変遷について、Stéfanini (1962, p.118) は “Au fur et à mesure que douter évoluait vers un contenu plus intellectuel qu’affectif, se douter suivait cette évolution, mais sa voix le maintenait bien davantage dans une sphère affective.” と述べている。要約すると、douter は知的なとらえ方を伝える方向に変化し、se douter は態として<sup>(8)</sup>情意的なとらえ方を伝

えることを保持してきたということである。では、事態を知的にとらえるとは、そして情意的にとらえるとはどういうことなのだろうか。Stéfanini (1962) にさらに考察をくわえる。

#### 4. 2. 仮説

古フランス語において douter は craindre の意味であった。ものごと X を「おそれる」とは、「(non-X の認識はあるが) X となったらどうしよう。」という感情である。しかし、冷静に知的に考えた場合には、「non-X なのではないか。」という疑問もわいてくる。提示された X に対して知的な判断をし、疑問をもつということは、non-X の存在を大きく認識するということである。そして主体の知的な判断によって non-X > X となったときに、「non-X なのではないか。」という douter をもちいる発話に及ぶと考えられる。

また、se douter も craindre の意味であったが、第 1 章でみたように、se のはたらきによって、主体が X に対する「おそれ」の影響を被ることをあらわすという点において、douter との違いがみられた。つまり、se douter は「(non-X かもしれないが、主体にとって) X となったらどうしよう。」という感情を伝える表現であった。このとき主体の内部は X > non-X である。情意的にとらえるとは、主体内部の X > non-X をそのまま伝えるということである。

ところが、craindre の意味を伝えるには redouter がもちいられるようになったので、douter と se douter から「おそれる」の意味が薄れ、現在の douter は、「(知的判断によって) non-X なのではないか」という意味になり、se douter は情意的側面だけが引き継がれ、「X だと思う」という意味になったのではないかと推測される。「se douter は古フランス語期の代名動詞の受動的性質、つまり「動詞のあらわす事行の対象を、事態や現象に向けるのではなく主体内部に向けるはたらき」を保持しつつ、変遷を経て現在の意味になった」という仮説がたえられるのである。

ただし、douter と se douter の変遷は、同じスピードで進んだのではないようだ。なぜなら、古フランス語のいくつかのテキストにおいては、douter (de)

X が「X をおそれる」という意味だけでなく、現代フランス語と同様の「non-X なのではないか」という意味に解釈される例もかなりみられるのに対し、se douter が「～だと思う」という意味に解釈される例は、われわれが知る限り無いからである。

## 5. おわりに

本稿は、se douter をもちいた発話のしくみについて、douter の語源にさかのぼり、古フランス語を観察し、Stéfanini (1962), Franckel (1990), 曾我 (1999) のそれぞれにさらに考察をくわえたものである。それによって、douter と se douter のあらわす意味の違いは、se の機能だけでなく、語の変遷が大きくかかわっているという仮説を示した。

しかし、本稿では、現代フランス語の se の機能のひとつとして、古フランス語におけるそれと同様の受動的性質をあげるだけにとどまっており、se の本質的な機能について触れるにはいたっていない。それを今後の課題とし、さらに se の機能についての研究をすすめたい。また、se が douter の場合と同じような発話操作のマーカーとなる代名動詞は、他にどのようなものがあるのだろうか。douter 以外の認知動詞についても観察してみる必要があるであろう。それもまた、se の機能の追究とともに今後の課題とする。

### 注

- (1) 本稿ではとくに出典を記さない発話例は、インフォーマントの協力を得てわれわれが作ったものである。
- (2) 古フランス語における代名動詞の分類において、現代フランス語と共通する相互用法、再帰用法、受動用法にあてはまらない用法を *moyen* と名付けている。
- (3) douter に関しては、*Tristan* において 80 例、*Artu* において 14 例。se douter に関しては、*Tristan* において 22 例、*Artu* においてはわずか 1 例であった。
- (4) 古フランス語の意味解釈は、古フランス語の専門家である関西学院大学の伊藤了子教授の助力を得たものである。
- (5) QNT とは *quantitatif* 「量的」で、Franckel の論のなかでしばしばみられる用語で

ある。この場合、既存で認識可能なものととらえて差し支えないであろう。また、対義語として QLT (qualitatif) 「質的」がある。

- (6) インフォーマントは高学歴のフランス人 3 人、および関西学院大学のオリビエ・ビルマン教授である。
- (7) 日本在住のフランス人翻訳家で、関西学院大学講師のエリザベート・末次氏によると、Je m'en doutais! を翻訳する際には「やっぱり!」とすると問題ないとのことである。「やっぱり」の意味するところもまた想定と事実の一致である。
- (8) 主体のおこなう動詞のあらわす事行がふたたび主体 (se) に戻るという、能動態と受動態の両方の性質をもつ中動態という考え方による。

### 主要参考文献

- BURIDANT, Claude (2000), *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Sedes : 299-309.
- CHÉNERIE, Marie-Luce (1994), *Le Roman de Tristan en prose, tome 1-8*, Éditions Universitaires du Sud.
- FRANCKEL, Jean-Jacques (1990), "douter", *Les figures du sujet*, Ophrys : 141-142.
- FRAPPIER, Jean (1964), *La Mort Le Roi Artu, troisième édition*, Droz.
- GODFROY, Frédéric (1881), *Dictionnaire de L'ancienne Langue Française et tous ses dialectes du IX<sup>e</sup> au XV<sup>e</sup> siècle*, Copyright ©2002 Éditions Champion Électronique.
- GUILLAUME, Gustave (1973), *Langage et science du langage*, Librairie A.-G. Nizet/Presses de l'Université Laval Québec : 127-142.
- MELIS, Ludo (1990), "Du couplage avec le sujet au couplage avec le verbe ou de l'ancien français au français moderne", *La voie pronominale*, Champs Linguistiques Duculot : 131-139.
- MÉNARD, Philippe (1988), *Syntaxe de l'ancien français*, Éditions Bière : 125-128.
- MOIGNET, Gérard (1984), *Grammaire de l'ancien français*, Klincksieck Linguistiques : 185-188.
- REY, Alain (1992), *Dictionnaire Historique De La Langue Française*, Dictionnaire Le Robert - Paris.
- RIEGEL, Martin (1994) *Grammaire méthodique du français*, Quadrigue/PUF : 255-263.
- STÉFANINI, Jean (1962), *La voix pronominale en ancien et en moyen français*, Ophrys : 117-118.
- 曾我祐典 (1999) : 「〈se + douter〉の機能」, 『人文論究』第 49 巻第 1 号 (関西学院大学人文学会), 21-33.
- 福田由美子 (2010) : 「古フランス語における douter と se douter」, 『年報・フランス研究』第 44 号 (関西学院大学フランス学会), 71-84.
- 福田由美子 (2011) : 「douter の機能-「うたがう」との比較をもとに-」, 『人文論究』

第 61 巻第 1 号（関西学院大学人文学会），215–227.

（博士課程後期課程）